

「最終講義」から2年

今日で「最終講義」から2年になる。時の経つのは早いものだ。2014年2月22日土曜の午後2時、名古屋市大滝子キャンパスの人文社会学部棟2階201教室である。

「2」という数字が偶然にも並んだ。「201」は講義・講演会などによく使う、慣れ親しんだ教室である。写真上は自作のポスターだ。あとから事務局の人がもっと見栄えのするポスターを作ってくれたが、自作のものも気に入っている。

1週間ほど前から、風邪で喉を傷めた。声がきちんと出るか心配で、数日前から「発声練習」をくり返した。映像も何本か使うので、寒い教室でこっそり「映像チェック」を何回も行った。本番ではなんとか声を出せ、映像もあまり問題なく流せた。私もしばしば登場する懐かしの映像がいちばん「エイゾー」という声が多かった。

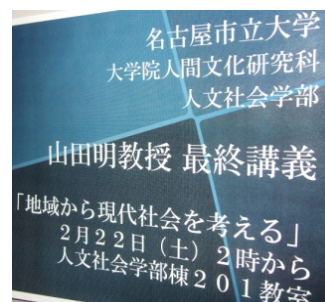
当日は風が強くて寒かった。事務の人に頼んで早めに暖房を入れてもらったが、なかなか暖まらない。

6階の研究室と教室を何回も往復した。

どれだけの参加者があるか不安であった。開会の30分ほど前から人の波が続き、広い教室が埋まっていった。学部学生は受付・誘導などを手伝ってくれたゼミ生をはじめ、1年から4年まで参加してくれた。2年の社会調査実習「山田班」の大半の学生も来てくれた。この学生は3月で卒業する。早いものだ。多くの院生、修了生、卒業生が参加してくれた。卒業生の中には、短大時代のゼミ生の姿もあった。そのほか多くの市民、教職員の参加があった。とにかく「キンチョー」のなかでの最終講義であった。

あれから2年。参加してくれた2人の同僚が亡くなった。教室の真中で、車椅子で熱心にメモをとっていた石川洋明さん。彼の「コメント」は大切に取ってある。終了後、1階会議室で卒業生たちに囲まれ、ほほ笑む彼の姿を思い起こす。もう一人は、昨年末に亡くなった滝村雅人さん。障害者福祉の研究者であり、多くの院生を指導していた。一緒に仕事をする機会もあり、教えてもらいたいことも多かった。残念でならない。

何とんでも「サプライズ」は、京ちゃんが来てくれたことだ。案内はしてあったが、寒いので無理だと思っていた。教室の最前列で、熱心に講義を聴いてくれた京ちゃん。手作りの心温まる色紙を贈ってもらった。「最終講義」をきっかけにして、障害者問題への関心が高まっていった。



(2016年2月22日)